

いよいよ本格的な夏が到来する季節となりました。会員の皆さまにおかれては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。今年度の第 45 回大会は、三上敦史会員のご尽力により資料見学会・研究発表を北海道札幌市で行いました。コロナ禍により 2020 年度の中止、2021 年度のオンライン開催を経て、3 年ぶりの現地開催となりました。当日は、多くの皆さまのご協力・ご参加を得られましたこと、心より御礼申し上げます。今号はその大会参加記を含む大会全体の報告と事務局からの諸連絡をお伝えします。

I. 大会報告

全国地方教育史学会第 45 回大会記

三上敦史（北海道教育大学）

2022 年 5 月 21 日（土）・22 日（日）の両日にわたり、実に 3 年ぶりとなる現地開催で、第 45 回大会を開催しました。

21 日は北海道立文書館・北海道立図書館北方資料室の複合施設（江別市）での史料見学会。文書館は認証アーキビスト（国立公文書館）である山田正・主任文書専門員、図書館は一戸泰・北方資料サービス課長のご案内により、両館の書庫を順次一周しながらご説明を賜りました。文書館では重要文化財に指定されている開拓史文書の管理方法について説明かたがた一部をご紹介いただき、図書館では北方資料（北海道の郷土資料＋樺太・千島列島等に関する資料）についてご教示をいただくなど、今後の研究に多大な示唆を頂戴したことに感謝申し上げます。



22 日は JR 札幌駅に隣接する札幌市男女共同参画センター（エルプラザ）の研修室を借用しての研究発表・シンポジウム・総会。例年通り、活発な研究発表・シンポジウムとなったことは何よりで、企画・運営・発表に直接携わった各会員に敬意を表します。また非会員であるにもかかわらず、遠路はるばるパネリストとしてお越し下さった鳥居和代（金沢大学）・太多和雅絵（横浜市学校事務職員）両先生には心より御礼申し上げます。

大会校として申せば、初日の資料見学会はアクセス良好かつ天候に恵まれたため万全でしたが、研究発表・シンポジウムについては大学校舎を使用できないため、種々ご不便があったことと存じます。該当される会員におかれてはどうかご寛恕下さい。それでも教育学関係学会では、コロナ禍の襲来後における（恐らく）

初めての現地開催ができたことに心から安堵しております。既に本年度も大会のオンライン開催継続を決定してしまっている学会が多数ありますが、今後の判断に一石を投じる結果になるよう期待したいと思います。

なお最後に一つ、要望を申しますが、大学に所属されている会員の皆さまにおかれては附属図書館の一般利用再開のため、できる範囲で声を上げて欲しいと思います。とりわけ研究大学の附属図書館が学内にしか開かれていない現状は、人文・社会科学系の少くない学問分野に研究活動の停滞・衰微・途絶を招きかねない危機をもたらしています。他大学の院生・PD、大学に所属されていない研究者にとって、それは致命的なことかもしれません。国立大学の場合、地域代表である研究大学が率先して開放し、地方国立大学がおずおずとそれに続くという形でしか、事態は進展しないと思います。もちろん公私立大学についても、それぞれの事情を乗り越えて早期再開を目指して欲しいものです。

地方教育史に携わる我々の多くにとって、実際に現地に赴いて資料を手にし、人と語らうことは研究遂行上、不可欠のことです。学会を現地開催することの価値を最もよく理解しているのも我々だろうと思います。北の果てへお越しになった皆さまがそうしたことを再確認する機会となったとすれば、大会校冥利に尽きます。来年も日本のどこかで現地開催できるよう、祈念しております。皆さま、大変お疲れ様でした。

【大会参加記】

大会に参加して

杉山悦子（四国大学）

新入会員の杉山悦子と申します。3年前に東京から徳島市に勤務地を移したご縁で、徳島県教育史研究に携わることになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

初日の北海道立図書館と文書館の見学では、貴重な史料を拝見させていただきました。都道府県の公共施設において文化財保存の比重が高まっておりますが、博物館、文書館、図書館で収集する領域についての棲み分けや、教育史料の保存や収集における課題が、地域を越えて存在することを確認できました。

見学終了後の懇親会では楽しく歓談させていただきました。初日に懇親会があったことで、リラックスできたように思います。初めての席にもかかわらず、まるで旧知に出会えたような居心地の良さを覚えました。温かく出迎えて下さった会員の皆様に感謝申し上げます。

翌日の研究大会は密度の濃い時間で、どの御発表も興味深い内容でした。しかし残念ながら飛行機の乗り継ぎ便の都合で、鳥居先生の御発表の終了後には、後ろ髪を引かれる思いで退室せざるを得ませんでした。

帰路の途中で考えたことは、地方における「風俗と自治」との連関です。都市文化は若者の「憧れ」である一方、大人側からすると若人を惑わす「怖れ」と見做され、風俗については制限することが地方における教育命題の1つだったように思われます。つまり「自治」には包摂と排除が伴いますが、その思考は地方だけではなく都市においても存在したと思われ、どのような状況だったのだろうと気になりました。何を周縁と見做し、住む町を何から守ろうとしたのか、そこで要請された教師、社会教育を下支えした大衆とりわけ母親たちの同意にも目を向ける必要を思わされました。昨年、ゼミの学生が徳島県で今でも稼働している「有害」図書のためのポストについて調査したのですが、青少年の「保護」という名で継続している現在があるように思います。

充実の2日間は、様々なことを考えるきっかけを与えてくれました。ほんとうにありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



極私的大会参加記

知本康悟（新潟市）

私のなかで、全国地方教育史学会は、現地開催以外はありません。もう少し言えば、研究発表と現地見学会、そして懇親会の三本がセットになって、はじめて意味を成す学会です。「現地での資料見学会を特徴とする本学会の場合、オンライン開催で最低限の役割を果たしたと胸を張ることはできず、大変残念なことでありました」（地教史学通信第155号）。コロナ禍の下、北海道大会の準備に奔走された三上前事務局長の言葉です。状況が許すなら、今年こそは何としても現地開催を、という強い思いが伝わってきました。そして迎えた万緑の5月、北海道で3年ぶりの現地開催です。

「参加」から学びの「旅」へ

私事ですが、入会して13年。第35回大会（和洋女子大）を皮切りに、42回大会（大東文化大学）まで8回連続参加しました。内、40回大会は私のふるさと佐渡での開催。中止になった神戸大会をはさみ、オンラインの北海道大会は不参加でした。

定年退職後、一銭にもならない暮らしをして7年目になります。幸いなことに、時間だけはあります。学会への参加の仕方も変わりました。まずは、開催地に合わせ自分だけのテーマを決めます。前日に行われている中等教育史研究会を組み入れながら、前後の日程を少し厚めにします。そこに、教育史に関わる資料調査も含めた歴史や文化の探訪が入ります。学会への「参加」は、学びの「旅」になりました。常に自腹参加の高い交通費です。ぼんやりしてられません。未踏の地で、寸暇を惜しんで学び、楽しみます。

今回のテーマは、「宮本常一と拓北農兵隊」です。現在「宮本常一と佐渡」をテーマに調べています。「旅の巨人」と言われた宮本が、最も多く訪れたのが佐渡であり、なかでも拙著『村に立つ教育』（本の泉社、2019）の舞台である羽茂です。宮本は、戦後、農村と離島振興に尽力しますが、羽茂は、生産共同体の成功モデルでした。その宮本が、敗戦後、大阪空襲で焼け出された被災民を引率し、北海道に渡ります。拓北農兵隊（敗戦後は拓北農民団）です。それは、食糧増産と開拓移民の名の下に行われた国の「棄民政策」でした。宮本の評価にかかわる出来事です。宮本は自著（『民俗学の旅』）でもこのことを書いていますが、宮本と拓北農兵隊に関する資料を集めるのが今回の目的です。

18日の午前には新潟を立ち、午後にはさっそく北海道立図書館北方資料室で資料調査。19日は、終日宮本が訪れた新十津川のフィールドワーク（開拓資料館、町立図書館など）。20日午前「北海道開拓の森」を見学（教育関係、及び農業開拓関係の建造物など）し、午後は中等教育史研究会に。21日の午前には、北方資料室で二回目の資料調査をし、午後はそのまま同所で現地見学会に参加。22日は、終日研究発表会など。

実は、今回見学会の会場になった北海道立図書館北方資料室には、昨年予定されていた北海道大会の前に、資料請求をしたことがあります。その際、大変丁寧な対応をしていただき感激しました。今回も、事前に蔵

書検索をし、資料リストをつくってのぞみました。資料調査では、赤茶けて文字も薄れた「北海道集団帰農者書類（全）昭和20年」などの一次資料も含め、予定していた以上の資料を入手でき、大収穫でした。

資料見学会の醍醐味

資料見学会は、北海道立図書館・北方資料室と北海道立文書館の複合施設で行われました。両施設の相談カウンターは並んで設けられており（これは、珍しい）、両館が所蔵する資料を共有の室内でみるができます。ここでは、北方資料室の見学会にしばらく報告します。

同資料室は、北方地域（北海道、北海道に関係の深い旧樺太・千島列島及びその周辺地域）の過去、現在を知り、未来を展望できる資料（「北方資料」）を、あらゆる分野において網羅的に収集しています。歴史研究はもちろんのこと、住民の暮らしや地域の課題解決に寄与することを目的にしているからです。逐次刊行物（雑誌・新聞）を、実に約31,000タイトルを所蔵し、雑誌は1,100タイトルを継続収集しています。

貴重資料置き場等資料室の中を一通りご案内いただいたあと、私たちのために、北海道の教育史に関するミニ展示が、用意されていました。閉校記念誌や教育月報などと並んでひときわ目を引いたのが、北海道尋常高等小学校書道作品展に出品された2年生の児童作品です。題は「みくにの光」。どの作品も、「うまいねえ」と驚きの声上がるほどのできばえです。凜とした品があり、戦時下の空気も伝わってきました。こうして、個人ではなかなか見ることができない施設の中を見学し、時下貴重な資料にふれることができるのが、資料見学会の醍醐味です。

見学会のあと、案内をして下さった一戸泰さんに、お話をうかがいました。

「パンフレット類から学校案内まで、とにかくコツコツと収集します。」「そのために 毎日20種類位の新聞をチェックし、ひたすら一軒一軒あたりお願いをします。そして、 礼状のハガキを出します。地べたを這いずるような仕事の繰り返しですね。」「

「来られたお客さんは手ぶらでは帰しません。何かわかったことがあったら、コピーを とり、持って帰ってもらうことを大切にしています。」「

柔らかな語り口から発せられる言葉には、使命感を持ったプロの信念が込められていました。図らずも、すでに資料調査をしていた私は、この言葉のもつ意味を、実感と感謝をもって受け止めました。

「本会の特徴は、現地資料見学会があることです。改めて私たちの研究がこうした活動 に支えられていることを再認識させられました。」「

荒井代表が、閉会にあたり述べられたこの言葉に、今回の現地資料見学会の意味が集約されていました。

研究発表に学ぶ

今回は、古川和人氏（「戦後六・三制発足期の旧沼津市における新制中学校区立校舎建設に伴う資金調達活動に関する研究―建設貯金の割当及び教育公債公募に向けた市議会教育委員会での審議過程の分析を通して―」）と、寺澤雪穂氏（「東京都における勤評反対運動―四町方式が生まれるまで―」）の二つの発表から学ばせていただきました。ここでは、寺澤氏の発表にしばらくします。感想めいたことしか書けませんが、ご容赦下さい。

原石のような論稿だと感じました。

論者は、四町方式獲得までの経緯を、「自治」または「自治の精神の獲得」という視点で論を展開しています。論文中には、自治を使った用語が要所で使われます。「自治」「独自の自治の精神」「東京都多摩地区特有の自治の精神」「市町村の完全自治」「完全自治への意向」など。辞書的な「自治」はもちろんのこと、確かに「自治」は、地方自治、町内会の住民自治、学生自治など、さまざまな使われ方をします。はては、農民運動や労働運動、市民運動にかかわる自治的な取組みや組織、文化や思想といった場合、「自治」

という言葉の意味合いは、さらに違ってくるでしょう。さまざま使われている「自治」という言葉がもつ意味と使い方の整理が、必要だと思いました。

次に、フロアから出された「自治という言葉が縷々使われているが、自治の力学を描くことで、自治の精神はにじみ出てくるのではないか」という趣旨の意見に共感しました。今回の発表で、直接関わる自治は地方自治だと思います。辞書的に言えば、地方自治は、国家の統治に対し、地域・地方の運営について、地方の住民の意見に基づき行うということです。本報告では、四町の内、国立町、保谷町は住民の合意形成を意識しており、保護者の請願が勤評実施延期の決定打になった、と指摘しています。ここに「自治の力学」があります。

勤評反対闘争においては、子供を真ん中に置き、学校（教師・校長）、保護者・地域、行政（教育委員会）が、どのような力学を生み出しながら運動を展開し、どのように合意を形成し、どれだけ一体となった取り組みができたのか、が問われます。そのなかで、保護者と校長（会）が、大きな役割を果たしていたはずですが、

今後、国立町など一つの地域を取り上げ、具体的に広く深く運動の過程を掘り下げる研究を期待します。勤評闘争を通した、住民の血の通った自治獲得の精神がにじみ出てくる物語です。



シンポジウムの魅力

今回のシンポジウムは、「都市の教育問題」をテーマに行われました。資料見学会同様、中止になった神戸大会で予定されていた念願のシンポです。

吉野剛弘氏を司会に、久保田栄助氏（「学校と風俗街の関係史—大阪飛田遊郭新設を巡って—」、鳥居和代氏（都市の生活環境と校外風紀問題—校外教護・保護の歴史から—）、大多和雅絵氏（「1950年代における都市の青少年の教育問題と夜間中学校—神奈川県横浜市を対象として—」）の三氏をパネリストにお迎えしました。鳥居氏と大多和氏は、会員外です。入念に準備された三氏の発表について、それぞれ紹介は出来ませんが、単独の発表としても聞いていたい質と量を備えていたと思います。

さてシンポは、鳥居報告のなかでとりあげた戸坂潤（思想家）の言葉を糸口に展開されました。戸坂は、思想と風俗は一体のつながりがあり、風俗を抑圧せねばならぬ時は思想を抑圧する必要があるときだ、と言います。であれば、「思想と風俗の連続性について、それぞれ都市の教育問題についてはどうなのか」という問いが、フロアから出されました。

シンポの本番です。私は、戦後教育のなかのどこかで使われていた、「社会の皮膜としての学校」という言葉を思い出していました。以下は、私の解釈です。

まず、久保田報告から。戦前、夫人・母親は、善良で強健な「第二国民」を養成することが、国家に尽くすべき最大の任務でした。そんな母親たちにとって、遊郭が文教地区に隣接して立地するのは、許しがたいことでした。「健康地」の風紀の乱れにつながることを恐れたからです。自然主義思想と文学の流行と若者へ浸透する危機感が、こうした反対運動の背景にありました。

次に、鳥居報告です。1930年代においては、何らかの価値観を持つことが取り締まりの対象となりました。その意味で、学生・生徒の自由な文化への傾倒（カフェ、ダンスホール、映画館など）は、演説会などへの参加と並び危険な傾向でした。こうした「校外風紀問題」が、天皇制と軍国主義を支える社会秩序の弛緩をもたらすことを恐れたからです。そこで、学校教育の場が、校外教護・補導の対象になりました。

非戦の思想的・文化的な培養地は、こうした都市文化でした。両者に共通するのは、「危険な思想や退廃的な文化」から天皇制や軍国主義の思想や文化を守るため、学校に、その皮膜として役割を果たさせていたことです。

最後に、大多和報告です。1950年代、学齢期の子どもの不就学・長期欠席と青少年の非行・不良化が社会で問題視されます。この対策として構想されたのが、「夜間に授業を行う」学級（夜間中学校）でした。こうした子どもたちを、学校に囲い込むことで、青少年の非行や不良化を防ぐことが目論まれたのです。学校教育でありながら、社会的な機能としては、社会保障と社会教育両領域の間に位置づくものでした。夜間の学校が、行き場のない子どもたちを学校に囲い込むことで、学校が青少年の非行化、言い換えれば「非行文化」から子供を守る社会の皮膜としての役割を果たしたことになります。

言うまでもなく、学校は教育の場であり教化の場でもありました。したがって、常に時の政治体制や社会・文化状況に規定されてきました。フロアからの問題提起は、都市における教育が、時代のもたらす思想や文化状況のなかで、どのような問題や課題をはらみつつ展開されていたのか、その歴史的な教訓は何かを問うています。戦前については言わずもがなですが、大多和報告では最後に、夜間中学校が「いわば教育問題のプラットフォームとして機能したことは手放しに喜べないことでもある」と指摘しています。こうした今日的问题意識に学びたいと思います。

北海道立図書館のまわりには、タンポポの花がちりばめられた緑のじゅうたんが広がっていました。そこには、すくっと天にのびたポプラの樹が二本。空気は、あくまでも清々しくかつ冷たからず、体を包みます。思わず、深い息をしました。街には、半袖姿の人もちらほら。北海道は、そんな季節を迎えていました。

ここより緯度は高いので、少し空気は冷たいでしょうが、この初夏の色彩と空気感は、ヨーロッパの東部につながっています。普通の年なら、良い季節を迎えているはずです。ウクライナの今を思いました。

来年は、神戸でしょうか。現地で、みなさんとお会いしたいと思います。運営に当たられた、荒井代表をはじめ須田事務局長と三上前事務局長、お世話になりました。そして、大変ご苦労様でした。

【総会報告】（一部割愛）

1. 来年度の大会校について

コロナ禍の状況を見極めつつ、以下の3案をもちつつ幹事会で継続審議をすることとなりました。決定し次第、HPや本通信をもってお知らせいたします。

①甲南女子大学（大会校・軽部勝一郎幹事）

②藤女子大学（大会校・大矢一人幹事）

③愛知県開催（愛知県女性総合センター（ウィルあいち）＋博物館明治村、吉川卓治幹事）

III. 諸連絡（一部割愛）

【寄贈図書】

・早稲田大学大学院教育学研究科日本教育史研究室『日本教育史論集』第9号、2022年3月（本学会員の執筆者：湯川次義「私の研究の足跡」、奥野武志「規律的運動としての教連と永井道明の軍隊的精神」、野口

穂高「昭和初期の東京市における「林間学校」実践」、梅本大介「米軍占領下における日本の教育行政改革に関する研究」、木田竜太郎「旧制教育機関の新学制移行過程と私学経営・ジェンダー」、小松靖「小田原市立第二中学校による職業科教育研究における一考察」、雨宮和輝「仏教女子高等教育機関の設立経緯に関する一考察」、長谷川鷹士「戦前師範学校における「男女共学」)

- ・教育情報回路としての教育会に関する総合的研究会『近現代日本における「学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築」の総合的研究 報告書（Ⅰ）』2022年2月（本学会員の執筆者：須田将司「教研活動の組織化と展開」、杉山悦子「戦後初期の徳島県教育会機関誌と関連文献」)
- ・木村政伸『教室の灯は希望の灯ー自主夜間中学「福岡・よみかき教室」の二五年ー』福岡県人権研究所、2022年6月、全117頁、ISBN：978-4-910785-06-6、本体¥1,100。
- ・福島県相馬市『相馬市史』第3巻 通史編3 近代・現代、2022年5月、(本学会員の執筆者：須田将司、第一章第四節「近代教育制度の整備（近代教育のはじまり／相馬郡教育の中心地）」、第二章第四節「戦時下教育への変転と戦後六・三・三制への再編（大正期における教育の拡充／恐慌から戦時に至る中の相馬の教育／戦後改革期における教育の再編）」、第三章第四節「現代の教育（相馬市教育行政と教職員研修の展開／相馬市における小・中・養護学校教育の展開／児童養護施設・幼児教育機関による保育・子育て支援の拡充／相馬市内における高等学校・高等教育機関／社会教育から生涯学習へ）」)

IV. 事務局より

【会費納入について】

会費の納入をお願いします。今回の通信に金額入り（¥4,000）の振込用紙が入っている方は昨年度までの会費納入が終了しておりますので、2022（令和4）年度分を納入して下さい。金額なしの振込用紙が入っている方は未納分がありますので、封入したメモをご覧ください、未納分も納入して下さい。入金された旨、うちよ銀行から連絡がありましたら、速やかに当該年度の『地方教育史研究』を発送します。

【『地方教育史研究』第43号の発送について】

2022年度会費を納入いただいた方に、6月28日付で発送済です。

全国地方教育史学会 事務局

〒112-8606 東京都文京区白山5丁目28-20 東洋大学文学部教育学科 須田将司 研究室内

TEL/FAX 03-3945-7378

E-mail suda@toyo.jp

公式HP <https://w3.waseda.jp/assoc-zckyoiku/>
